

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3752号 2017.7.4 発行

タカタ破綻1週間 雇用、取引維持へ幹部奔走 創業地・滋賀 / 製造拠点・佐賀

佐賀新聞 2017年07月04日

### ■見えぬ先行き、消えぬ不安

欠陥エアバッグ問題でタカタが経営破綻して1週間がたった。動揺が走った創業地の滋賀県と製造拠点のある佐賀県では、タカタの幹部が関係自治体を奔走し、再建へ向け生産や雇用を維持する考えを強調。下請け企業にも取引継続を訴えている。従業員や取引先から「不安がっても仕方ない」との声も出始めているが、先行きは見えず、懸念はくすぶったままだ。

### ▽あきらめ顔

「こちらとしては、とにかく待つしかない」。佐賀市のホテルで3日に開かれたタカタの債権者説明会。出席した取引業者の一人はあきらめ顔でそうつぶやいた。納入代金がどの程度弁済されるかや、再建スケジュールが分からず、落ち着かない思いを抱えている。

佐賀県には2カ所の製造拠点があり、タカタの再生計画次第で振り回される従業員や下請け企業は多い。タカタは来年3月までにスポンサーとなる中国系米企業に事業を譲渡する方針だが、それにより「取引を失ってしまうのではないか」との懸念も根強い。

県の担当者は「タカタは雇用や処遇を維持すると言っているが、将来的にどうなるか分からないという不安はあると思う」と指摘。状況を注視して対応していく考えだ。

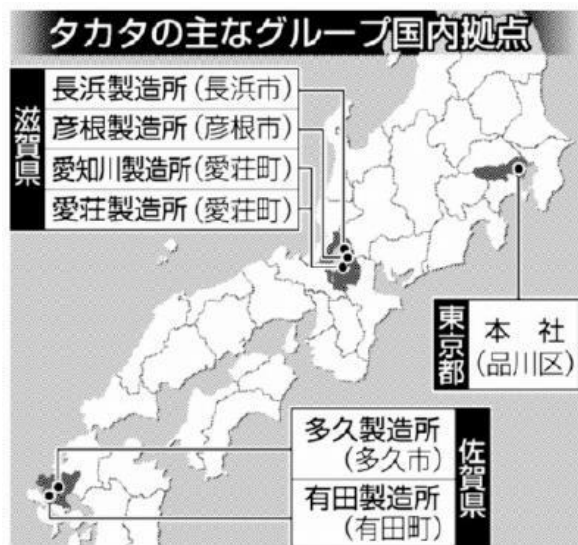
### ▽予断許さず

「滋賀の地は私どものふるさと、発祥の地。誠に申し訳ない」

滋賀県長浜市で先月30日に開かれた債権者説明会で、タカタの吉田勉取締役は陳謝した。県内4カ所の製造拠点は計約850人の従業員を抱え、1次下請けも約130社と多い。今後の再建のためにも「取引を継続し、部品の供給に協力いただきたい」と呼び掛けたが、出席企業からは「取引を継続しても、本当に支払いがされるのか」など不安の声が相次いだ。

企業だけでなく。滋賀県東近江市の社会福祉法人「八身福社会」ではシートベルト部品を障害者約35人で作っている。小島滋之施設長は「タカタとの取引が入所者の給料に直結する。事業譲渡で単価や生産量が下がらないか不安だ」と漏らす。

タカタは破綻直後から幹部らが拠点のある滋賀県の愛荘町、彦根市、長浜市を行脚。生産は縮小せず、雇用も維持する考えを伝えた。しかし、今後も自動車メーカーとの取引を継続できるかどうかにかかっており、大久保貴彦市長は「予断を許さない」と身構える。



#### ▽再建協力も

創業地の彦根製造所（彦根市）では、従業員らが変わらない様子で出社を続けている。ただ女性社員の一人は「会社から特に説明はない」と話し、見通しは立たない。

一方で、再建に協力する動きも始めている。滋賀県甲良町の部品製造会社は2週間前から中断していたタカタとの取引を近く再開する。同県高島市の別の下請け企業も納入を続ける考えだ。担当者は「うちの会社も取引先の協力で再建した。部品を供給しないことには、タカタの生産自体が始まらない」と語った。【共同】

#### 24時間対応「心強い」と評価 栃木市の障害者支援事業 運用3カ月、周知に課題も

下野新聞 2017年7月4日

役所内に設置された「市障がい児者相談支援センター」

障害者が急に支援が必要になった場合に24時間体制で相談を受ける「栃木市くらしだいじネット緊急時支援事業」が、昨年11月の試行運用から8カ月、4月の本格運用から3カ月を迎えた。県内の自治体で初めてとなる国と県のモデル事業で、7月3日現在の相談件数は16件。障害者側からは「心強い」と好評を博す一方で、登録者が少ないなど周知と啓発が課題にもなっている。



同事業は、介護を行う人が病気になるなどして障害者が在宅での生活が困難になった場合に支援することを目的にスタートした。市障がい福祉課の職員4人と同課に常駐する民間専門相談員6人でつくる「市障がい児者相談支援センター」が、24時間365日体制で相談に応じている。

相談を受けた職員は電話や訪問により状況を確認、緊急的な支援が必要かを判断し、必要に応じて短期入所が可能な施設やホームヘルパーに連絡し支援する。支援期間は最長7日間。それ以上の対応が必要な場合は通常の福祉サービスに切り替えて対応する。

昨年11月の試行運用後に相談があった16件は「親が緊急搬送され介護者がいなくなった」「親に用事ができ通院の手段がなくなった」などといったケースのほか、家庭内のトラブルなどに起因。このうち5件が短期入所施設の利用で難を逃れた。

#### 障害者が農業担う「農福連携」でカシス収穫 黒石 北海道新聞 2017年7月4日

スタッフとともにカシスの実を取り外す「せせらぎの園」の利用者ら=3日



障害者が農業の担い手となる「農福連携」事業を進める青森県黒石市と黒石市社会福祉協議会（鳴海勝文会長）は3日、黒石市バイオ技術センター（田舎館村堂野前）敷地内に昨年植えたカシスの収穫作業を行った。今年は10日ごろまでに20キロを収穫する予定で、今後販路開拓を進める。

事業は昨年度から始まり、バイオ技術センター敷地内の遊休地約4千平方メートルを活用。

隣接する同社協運営の障害者福祉施設「せせらぎの園」（小山内勝治園長）の利用者が市内農家の指導を受け、昨年5月からカシス200本、ブルーベリー20本を育ててきた。

同日は雨のため、施設利用者14人や園の職員、ボランティアスタッフら計25人ほどが同センターに集まり、事前に切り取った枝からカシスの実を取り外す作業を室内で行った。

高橋憲市長は「農福連携による作物（づくり）は世界的な流れ。これからますます大切

な事業になっていく。希望や夢を抱きながら収穫してほしい」とあいさつ。利用者らは手作業で実を一粒一粒収穫していた。

市農林課によると、カシスの販売先は決まっていないが、県内の菓子店など数店舗から問い合わせがあるという。収穫したカシスは冷凍保存する。

同課の中田憲人課長は「ゆくゆくは園の自主事業としてカシス栽培を行ってもらい、障害者の自立につなげてほしい」と話した。

## 全身の筋力が低下する難病「脊髄性筋萎縮症」治療薬を初承認

読売新聞 2017年7月4日

全身の筋力が低下する難病の脊髄性筋萎縮（いしゆく）症（SMA）の初の治療薬「スピナラザ」（一般名・ヌシネルセンナトリウム）について、製薬会社バイオジェン・ジャパンは3日、厚生労働省から製造販売の承認を取得したと発表した。

8月中にも保険適用される見通し。SMAは主に小児期に表れる病気で、10万人に1、2人の割合で発症する。生後半年以内に発症する最も重いタイプは、寝たきりで体を動かすのが困難で、人工呼吸器などが生涯必要となる。新薬は、SMAと診断された重症の乳児が対象。日本人を含む国際共同治験では、約4割の患者が寝返りを打てるようになったり、自力で座れるようになったりした。米国や欧州連合（EU）では先行して承認されている。

## 女子学生に贈る言葉



NHKニュース 2017年7月3日  
女子大学生たちが私に言った。

「結婚や出産後の働き方がどうなるのか心配です、家族との時間も大切にしたい」

その言葉を聞いた時、20年ほど前の自分を思い出した。当時は就職氷河期。結婚後のことを考える余裕もなかったし、ましてそんなこと聞いたら採用されないだろうと思えなかった。今も子育てとの両立は綱渡り。そんな私を「将来働くため

の参考にしたい」と女子大学生たちが家にやって来たのだ。（ネットワーク報道部 飯田暁子）

### “専業主婦になりたい”＝尻込みする女子学生

今の女子大学生は4人に1人が専業主婦になりたいみたいだ。就職情報会社の調査にそう出ている。その理由を大学院生の新居日南恵さんはこう分析していた。

「社会に出る前に尻込みしてしまうんです」

“長時間労働” “保育園探し” “ワンオペ育児”

「仕事と子育ての両立は難しいという認識が広がり、未来のライフプランが描けない」

それが専業主婦になりたいという願望につながっているという。

そこで新居さんは大学生だった3年前「家族留学」という制度を立ち上げた。子育てをしながら働く女性の家に“短時間留学”し、実際の生活を見させてもらう。将来のライフプランを描くためのロールモデルを見つけるのが狙いということだった。

### 家族留学 その実態は

学生にわが家に来てもらう前に、別の家庭で家族留学を取材させてもらうことにした。

留学生は大学3年生の徳永萌夏さん。将来は管理職を目指したい、早く結婚も出産もし

たいという活動的な学生だ。留学先は不動産情報を扱う会社で働いている瀬川真子さんの家。夫と5歳の長女がいる。



(左) 徳永さん (右) 瀬川さん

2人の待ち合わせは午後5時40分、瀬川さんの仕事帰りの駅。ここから3時間ほどの留学だ。帰宅ラッシュの中、2人で地下鉄に乗り込む。午後6時すぎには保育園に子どものお迎え。家までの10分ほどの時間にその日の出来事を聞く。

ちなみに毎朝5時に起き、その時に夕食も作って帰宅後、温めてすぐ食べられるようにしている。こうした工夫で、子どもとの時間を増やすのだ。

その夕食の時間。焼きうどんを食べながら、徳永さんが質問をした。

「家事育児の分担はどうしているのか」



瀬川さんは正直に答えてくれた。

### 仕事と家庭 現実

朝は子どもを保育園に送るのは夫。ただ帰宅はほぼ終電。実質、家事育児のほとんどを私が担う。子どもと2人きりで精神的に苦しい。だから週1回、気晴らしに子どもと一緒に地域の交流スペースに顔を出し、夕食を食べる。

そして土日には数時間、夫が子育てを引き受ける。1人の時間もほしいから。

ただ「仕事にやりがいを感じ、結婚や出産はマイナスにしかならないと思っていたが、実際は視野が広がった」という。

それでも大変だと思ったのだろう、徳永さんは言った。

「就職先を選ぶ時、業種や待遇だけでなく、結婚出産後も働き続けられるように福利厚生

の充実も重視したい」

「それは違う」

瀬川さんははっきりと言った。

“自分の働きかけで変える”

「大切なのは福利厚生

の充実ではない。制度があっても周囲の理解がなければ使えないこともある。一方、仕事の進め方や人間関係は自分の働きかけで変えることもできる。1人だけしか分からない仕事をなくしたり、お互いに助け合うことを決めたりする。それができれば誰にとっても働きやすい職場になる」

勤めている会社に出産後も働いた例がなく、辞めて当然という雰囲気の中で道を切り開いてきた瀬川さん。その言葉には説得力があった。

### わが家に女子学生がやって来た

いよいよわが家にも女子大学生がやって来た。しかも3人だ。大学4年生の中原真都香さん、3年生の稲永真守梨さん、それに代表の新居さん。

この日の家族留学は日曜日の午前10時から午後2時。わが家は夫と8歳、5歳の男の



子2人の4人家族だが、この日は夫が仕事で“ワンオペ”の日だ。

朝から外は雨。元気をもてあましてけんかばかりしていた子どもたち。こんな様子を見て参考になるのだろうかどと危ぶみつつも、社会に出る前にどんな不安を感じているのか、聞いてみることにした。

不安は主に2つ。1つは「子どもに寂しい思いをさせたくない」だった。

母親が専業主婦だったという中原さんは「母が自分にしてくれたことを働きながら子どもにしていく自信がない。小さいうちはそばにいてあげたい」と言った。

稲永さんも「祖父母が子どもと一緒にいてくれるとか助けてくれる人がいないと無理と思う」と言った。

そして2つめは「キャリアを築いても、結婚や出産で中断してしまう」という不安だ。

周りには「いっそのこと学生のうちに結婚、出産して子どもがある程度大きくなってから働き始めたい」という女子大学生もいるそうだ。多くの学生の声を聞いている代表の新居さんは「働く意欲がないのではない。長く働きたいからこそ学生のうちから結婚や出産について考えている。いろいろな家庭を見ることで、未来に安心感をもてるようにしていきたい」と話していた。

私の答えは「子育てをしていると以前と同じように働けないことはやむをえない。子育てを含め限られた時間の中で何をするかで勝負するしかない」。そして「仕事ばかり見ていた以前に比べ、地域に暮らす生活者として気付くこと、気になることは増えた。これを強

みとしていきたい」ということだった。

正解を探しながら歩く  
(中央) 筆者

これは実は自分を励ます言葉でもある。情けないが未来に安心感を持っていないのは私もいまだに同じだ。

仕事や子どもに対する考え方はさまざま、ほかの人の成功例が必ずしも私に当てはまるわけではない。さらに病気、介護、会社の盛衰。思うようにならない要素が長く社会にいれば

いるほどいくつも出てくる。

働くということはそのたびごとの自分なりの正解探しと思う。つまるところ私も今の時点での正解を探しながら歩いているにすぎないのだ。

“それぞれの正解を”

それでもこれから社会に出て行く学生たちには「両立など無理」とははじめから諦めてほしくない。それぞれの正解を探してほしいと思う。

今の社会が不安でもそれは永遠に続くのではなく未来は変化していく。ほんの10年ほど前は子育てしながら働く人を探すのは一苦労だったが、今、風向きは変わり先例はどんどん出てきた。

変化のスピードは確実に早くなっている。働き続ける、その大変さも知っているから大丈夫、絶対にやっつけていけるよと簡単には言えない。だけどがんばってほしい。未来の社会を作っていくのはこれから社会に出て行く人たちなのだから。



## 産後うつ 手遅れになる前に

NHKニュース 2017年7月4日  
幸せいっぱいのはずの出産ですが、いま、妊婦の10人に1人が「産後うつ」にかかると言われてます。泣き止まない赤ちゃんをあやしたり、3時間おきに授乳したり。とくに初めて子育てを経験する母親にとっては生活が一変し、大きなストレスにさらされます。また、出産後はホルモンバランスが急激に変化するため、精神の安定を崩して産後うつの症状が出ることもあるのです。



症状が悪化した結果、自分や子どもに危害を加えてしまうケースも起きていて、その対策が急がれています。

どうすればうつの症状に早めに気づき、治療につながられるのか。全国でも先進的な東京・世田谷区の取り組みを取材しました。(ネットワーク報道部 野田綾記者)

### 対策急がれる産後うつ

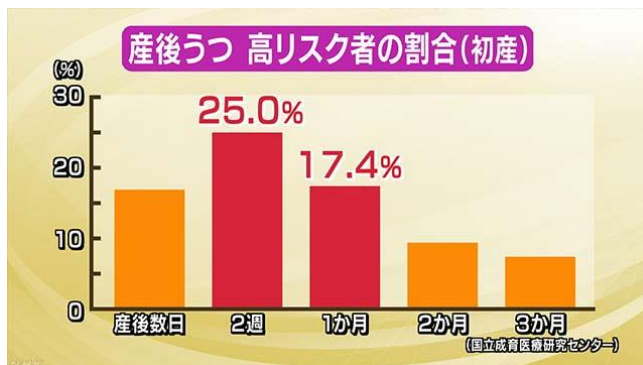
産後うつは、うつ病と同じ症状が現れる病気で、思いあたる理由もなく気分が憂うつになったり、感情のコントロールが難しくなったりします。また、やる気や集中力の低下を伴い、子育てにも支障が出てきます。

今回取材した母親の中には、もっと深刻な症状まで悪化したケースもありました。このうち、現在2歳の男の子を育てる母親は、出産直後から不安感やイライラを抑えられなくなりました。症状は日ごとに悪化し、一時は子どもを道連れに自殺することも考えたと言います。

実際にこうしたケースは珍しくなく、去年、茨城県では生後2か月の赤ちゃんが母親に殺害される事件が起きています。



買い物の途中で横断歩道とか高架下をのぞいて



産後1か月でも17.4%と、短い期間に集中してリスクが高まることがわかってきました。

そのため、策定中のガイドラインでも、出産まもない時期にうつの兆候を「早期発見」するよう求めることにしています。

### 東京・世田谷区の取り組み

母親たちの異変に早くから気づき、治療につなげていく先進的な取り組みが東京・世田

谷の母親は育児に悩んで産後うつの状態だったことがわかりました。

痛ましい事件が後を絶たない中、国や学会では産後うつへの対応策を盛り込んだ医療関係者向けのガイドラインの策定を進めていて、近く公表する予定です。

### 早期発見は産後2週間がカギ!

これまで産後うつの発症時期には個人差があるとされていました。しかし、近年の国の調査では、発症のリスクは出産から2週間後が25%と最も高く、



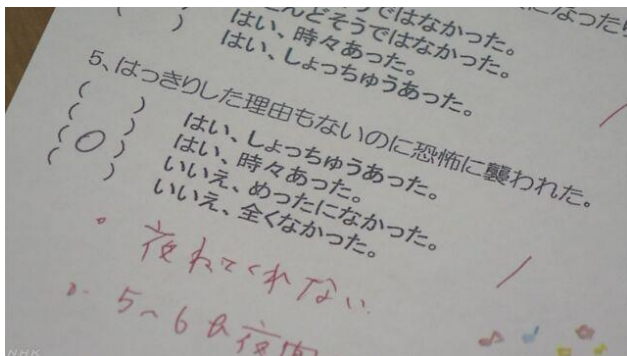
谷区で始まっています。

まず、早期発見を担うのが産婦人科医院です。出産後の健診は生まれてから1か月が一般的ですが、こちらの産婦人科では2週間後に行っています。そこでは赤ちゃんの成長を見るだけでなく、チェックシートを使って母親の精神状態も確認しています。

チェックシートで尋ねるのは10の質問。例えば、「はっきりした理由もなく不安になったり心配した」ことがないかや、「悲しくなったり惨めになった」ことがないかについて、細かく回答してもらいます。健診にあたる助産師はこれらの回答内容を慎重に検討して、**産後うつわずかな兆候も見落とさない**ようにしています。

産後2週間の健診を受けた母親の1人は「出産して自宅に戻ってから、子育てなどについて聞きたいことが次々と増えてきました。2週間のタイミングで健診を受けられたことは、気持ちの面でとても救われたと思います」と話していました。

この産婦人科医院によりますと、2週間健診によって、**母親の2割近くに産後うつの兆候が見られる**ことがわかったということです。



#### 精神科医師も巻き込む

では、兆候が見られた母親をどのように治療につなげていくのでしょうか。

世田谷区では精神科医との連携を強化して、母親をサポートしています。その足がかりとなっているのが毎月開催されている医療関係者の会合です。そこでは、産婦人科医や助産師、保健師に加えて精神科医も参加し、情報の交換や医療連携を深めています。



その結果、産婦人科では治療できない産後うつの母親を、精神科にスムーズに紹介できる枠組みが作られました。こうした異なる診療科がつながって産後うつのケアにあたるのは、全国的にも珍しい取り組みです。

#### 病気の芽を早めに断つ

この取り組みに参加している世田谷区内の精神科クリニックには、産婦人科医院や保健師から紹介を受けた母親が数多く通っています。

毎週通っている女性は、初めての育児で家族からも全面的にサポートを受けていましたが、漠然とした不安感が日に日に増していきました。ついに耐えきれず、区の保健師に相談したところ、精神科クリニックを紹介されたということです。女性は正式に産後うつと診断され、授乳中でも服用できる薬を処方してもらったことで、今では症状を抑えることができます。



クリニックの生田洋子医師は「産後うつは時間がたてば自然に治ると思われがちで、医療関係者にもそうした誤った考え方が広がっていて対応が後手に回りやすい。早い段階から母親の不調に気付いて、治療につなげられれば、病気の芽が小さいうちに断つことができる」と話しています。

#### 親子ダイケアも併設

さらに、このクリニックでは、受診に訪れた母親が子どもと一緒に利用できるダイケア

も行っていきます。常駐する臨床心理士や看護師にささいなことも相談してもらうことで、育児の不安を解消しようという狙いです。

さきほどの女性も「このクリニックに出会っていなかったら私は自殺していたのではないかと思います。今でももちろんイライラすることはありますが、元気に過ごしています」と気持ちの余裕を取り戻していました。



#### 今後の課題は

この記事をご覧になって、「産後うつのはある母親を精神科につなぐことがそんなに珍しいことか」と思った方もいるかも知れません。ただ、この取材を通して痛感したのは、うつの悩みを1人で抱えて悪化させたり、自然に治ると思って手を打たずに放置したりしたケースがあまりに多いと

いうことです。

また、助産師などに話を聞くと、精神科を紹介しても抵抗感を抱く母親が少なくないほか、育児を優先する責任感の強い母親ほど自分の治療を後回しにしがちだといえます。

家族など周囲の人は、精神科への受診を本人の意思に任せるだけでなく、一緒に受診することを促したり、場合によっては本人に代わって医師と面談したりすることも必要だと感じました。

現在、国や日本産科婦人科学会など関係機関が策定を進めているガイドラインにも、早期発見のための手引きや、専門医どうしの連携の在り方などが盛り込まれる見通しで、世田谷区のような取り組みがほかの地域にも広がることが期待されます。

### 信楽と台湾の障害者交流展・・・陶芸や絵画など

読売新聞 2017年06月30日

#### 創造力豊かな作品が並ぶ会場（甲賀市で）

日本と台湾の障害者の陶芸作品などを集めた交流展「しがらきから吹いてくる風」が、甲賀市の県立陶芸の森・信楽産業展示館で開かれている。7月16日まで。無料。月曜休館。



障害者支援施設「信楽青年寮」を運営する社会福祉法人「しがらき会」が2011年に台湾で作品展を開催したのをきっかけに、13年から信楽で台湾の障害者の作品を含めた交流展を開いている。

会場では、ピザの形や人の顔をかたどった陶板、色彩豊かな絵画、刺しゅうなど約40人の約120点を展示。来館者が創造力豊かな作品に見入っている。信楽青年寮の上田清樹施設長は「力強く、心の奥に響くような、表現力ある作品を楽しんでもらえれば」と来館を呼びかけている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行